

## 北海道探索病理学シンポ

# 田中教授が現状報告

第四回北海道探索病理学研究シンポジウム「探索医療～病理が橋渡しする最先端がん臨床研究」が札幌市で開かれた。主催した北大探索病理学講座（寄付講座）の田中伸哉教授（腫瘍病理学分野教授）が探索病理学の現状を報告し、「多くの臨床・基礎の共同研究が今まさに始まり、さまざまな成果が出つつある」と強調した。

探索病理学講座は社会医療法人北斗（帯広市）と企業二社の寄付を受けた二十一年十月開講。基礎研究と病理学研究の成果をいち早く臨床に還元することを目的として、がん個別化医療を中心とした新規治療法や診断法開発を目指している。二十三年度末までの設置期間は、実績が評価され二十八年度まで延長された。田中教授は開会の辞で、世界のがん研究から医療への流れを解説するとともに、本道の先人たちによる歴史的貢献について言及し、「こうした流れの下に、現在の私たちがいる」と述べた。

現在、同講座の西原広



「基礎と臨床の共同研究が始まり、成果が出つつある」と、北大探索病理学講座の現状を報告した田中伸哉教授

# 橋渡し研究 着実に成果

肺がん細胞でもEGFR活性とTKIの効果を高感度に検出できる」と表示した。

西原氏は、ゲノム病理診断への挑戦をテーマに講演。北斗病院でのがん遺伝子診断のデータ解析が進み、古いFFPEサンプルからでも「保存状態によっては、遺伝子変異を十分検討できる」と手ごたえを語った。また、北大病院臨床研究開発センターで数学科の協力も得ながら進めている「診断用遺伝子プロファイル解析バイオライン」の開発への概要を紹介し、期待感を示した。会場からは各演者へ盛んに質問が寄せられた。

史特任准教授が、北斗病院腫瘍医学研究所で次世代シーケンサーを用いてがん遺伝子診断を行っているほか、十月に発足した北大病院臨床研究開発センターでも生体試料端がん探索研究に関する発表。慢性骨髄性白血病（CML）における患者自身の細胞特性に基づく効果判定法を開発し、

同講座の貢献に期待と確信を表明した。

引き続き行われた最先端がん探索研究に関する発表。

セッションでは、大場雄